

## 『モリー先生との火曜日』

ミッチ・アルボム／著

日本放送出版協会、1998年9月発行、2階一般開架図書（請求記号：936／アル）

著者は37才。売れっ子のスポーツコラムニスト。

安定した職と家庭を持ちしかも仕事が面白いという三拍子そろった生活を忙しく送っている。迷いなど入り込む余地は無い。はずだった。

ある日、偶然テレビの人気インタビュー番組で大学の恩師の姿をみかける。恩師モリー教授は難病に冒され体の自由は奪われ"死にかけている"人になっていた。

日常生活に突如飛び込んで来たこの出来事をきっかけに卒業以来16年間音信不通だった（学生時代は毎日モリー教授に会い、語らい、共に食事をしていたのに！だ）教授の自宅を訪れることになる。

そして老教授の最後の授業が始まる。この授業に出た学生はたったひとり。テーマは「人生の意味」。愛・仕事・社会・家族・老い・許し・死。宣告された死と日々向きあっている老教授は言う。「憐れむより君が抱えている問題を話してくれないか」。

授業は毎週火曜日に14回続き、この本は授業の最終論文。教授の葬式は卒業式の代わりだ。著者は言う。「ときどきぼくは老師を再発見する前の自分をふり返ってみる。その自分に話をしたい・・・」と。

今十分に幸せな毎日を過ごしている方にも、そうでない方にもおすすりめの一冊だ。新鮮な自分を新たに発見するかもしれない。

原書の副書名は、An old man, a young man, and life's greatest lesson.

幸せな授業は今も心の中に続く。

## 『歩くと絵と』

片木太郎／著

高知新聞社、2000年5月発行、2階郷土資料コーナー（請求記号：K914／カタ）

どうしてそんなことになったのか、前後の経緯は全く覚えていないのだが、油絵具などの美術道具一式を、そっくりそのまま、授業の終わった美術室に置いて帰ってしまったことがある。

次の日の昼休みだったかに、その事に気がついて、恐る恐る美術準備室のドアをノックすると、ソファで昼寝をされていた先生は、不届き者の僕に小言を言うでもなく、「ほいっ」と忘れ物を渡してくださった。試験の点数やら靴下の色やらでヤキモキしている校内とは、全く違った雰囲気その部屋を出て、僕はRCサクセッションの『僕の好きな先生』を思いながら、教室まで帰ったのだった。

なんとなく予想はしていたのだけれど、あまり多くを語らない先生の中に、こんなに豊かな世界が広がっていたことを、僕はこの本を読んで初めて知った。そして、あの昼休みの美術準備室で感じた、なんともいえぬ伸びやかな気分の源が何であったのか、なんとなくわかった気がしたのだった。